

白山チブリエ尾根の繁殖期の鳥類

上馬 康生 石川県白山自然保護センター

BIRD COMMUNITY IN THE BREEDING SEASON OF CHIBURI RIDGE IN MT. HAKUSAN

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

はじめに

白山山系の鳥類センサスの一環として、筆者は今までに犀川上流、高三郎山（上馬 1977, 1978, 1979）、奈良岳ほか（上馬, 1981）、蛇谷（上馬, 1982）などの調査報告を行なったが、今回、同山系の中でも特に原生自然の状態を残している、白山チブリエ尾根の繁殖期の鳥類について報告し、これを他の報告の中の同様な環境のものと比較してみることにする。

調査地域

白山山頂から約5 km南に位置する別山（標高2399 m）より西方へ下っているチブリエ尾根は、手取川の源流の柳谷及び岩屋俣谷で囲まれたところで（図1）、大部分が原生自然状態であり、白山のブナ帯から高山帯下部にかけての典型的な原植生を示しているといえるところである。尾根は、上部では細く急峻であるが、下部は比較的緩やかで、そこに広がるブナ林の規模は、白山を代表するものの一つである。調査範囲は、この尾根に設けられた別山・市ノ瀬道の、市ノ瀬（標高830 m）から御舎利山（標高約2380 m）までの登山道沿いである。この地域は大別すると下から、川原のドロノキ林及び草原（I区とする）、ブナ林（II区）、ダケカンバ林及びアオモリトドマツ林（III区）に分かれるので、それぞれについて個体数集計を行なった。

なお、この地域の気象の記録はないが、下流の白峰村白峰（標高480 m）での過去10年間（1975年～1984年）の記録によると、最深積雪は平均252 cm（93～480 cm）であり、年降水量は約2500 mm～4000 mm、年平均気温は約10°Cと推定される（金沢地方気象台、1975～1984）ので、調査地域の最深積雪及び年降水量は、これらの値よりはるかに多く、気温は低いと考えられる。市ノ瀬では4月下旬まで、別山では部分的に8月になっても残雪がある。

調査方法

調査は1980年から1985年までの5月から7月

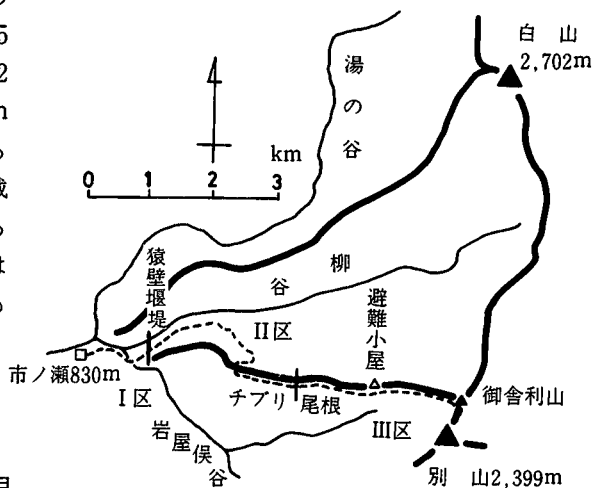


図1 調査地域概念図

に10回(一部は5回)行ない、出発点の市ノ瀬を日の出時刻頃に出て、線センサス法により記録しながら登山する方法をとった。各個体は、地形図および高度計により、できる限り正確に位置を記録した。個体数集計には、観察幅片側50m以内に出現した全ての記録を用いた。

なお、繁殖期の調査であるので、一般的にさえずりの盛んな早朝と、そうでない日中とでは記録効率が異なることが予想される。I区の調査出発時刻は4時35分～5時25分、II区では5時～5時50分であるのに対し、III区の起点の出発は7時50分～9時と遅く、しかも途中のチブリ尾根避難小屋(標高1910m)で休憩をとったので、終点の到着時刻は10時55分～13時と遅く、特にこの区域での記録効率の低いことが考えられる。ところが、III区の1980年7月の調査は、コースの約半分に当たる避難小屋から御舎利山までを、晴天の早朝に行なったにもかかわらず、他の調査時と大差ない結果となっている。

結果及び考察

期間中にコース全体で記録された鳥類は、センサス範囲の周辺を含めて50種(片側50mの範囲内では48種)であり、3つの環境区分別の集計結果は表1～表3のようであった。

1) 種構成

(1) 各調査地区の鳥類

I 区

市ノ瀬から猿壁堰堤(標高930m)までの範囲で、川に沿った車道沿いである。最初の一部を除くと、一般車は通行止めの道で交通量はほとんどない。市ノ瀬には登山センター、旅館等の数棟の建築物があり、センサスルート沿いは低木林やススキ等の草原である。また一部は、川の流りに沿っており、後半は川原の中のドロノキ林で、林内には低木やススキ等が繁っている。調査距離は毎回1.4kmであ

表1 チブリ尾根の鳥類集計結果(I区)

調査年月日	1980.7.17	1981.7.22	1982.6.22	1982.7.23	1983.5.23	1983.7.19	1984.6.28	1984.7.18	1985.6.20	1985.7.26	個体数合計	相対密度(N/km)	相対優占度(%)	出現頻度(%)
調査時刻	4:45~5:08	4:50~5:15	4:35~5:00	4:50~5:14	5:02~5:26	4:40~5:05	4:40~5:05	5:25~5:50	4:40~5:05	4:55~5:21				
調査時間	23分	25分	25分	24分	24分	25分	25分	25分	25分	26分				
天気	晴	晴	晴	晴	曇	晴	晴	曇	曇	晴				
カケス	14	1	1	4	5	2	1	4	2	6	40	2.86	25.2	100
ホオジロ	3	6	5	2	3	5	1	1	3	1	30	2.14	18.9	100
キセキレイ	2	1	5		4		2	1	1		16	1.14	10.1	70
ヒヨドリ	1	2	*		1	3	2		3	1	13	0.93	8.2	70
ハシボソガラス	2					4	1			6	13	0.93	8.2	40
ウグイス		1		1	1	1		2	3		12	0.86	7.5	70
シジュウカラ	5			1			2	4			12	0.86	7.5	40
オオルリ	2	1	2		2		1	1	1		10	0.71	6.3	70
ヤブサメ		1	2	1	1				1		6	0.43	3.8	50
コゲラ									1	1	2	0.14	1.3	20
カワガラス	1										1	0.07	0.6	10
トラツグミ	1			*							1	0.07	0.6	10
キジバト		1									1	0.07	0.6	10
アオゲラ					1						1	0.07	0.6	10
カモ sp.									1		1	0.07	0.6	10
アカショウビン									*		1	0.07	0.6	10
合計(16種)	31	14	15	9	18	15	10	13	16	18	159	11.36	—	—

*調査範囲外

り、調査時間は10回合計で247分であった。

出現種数は16、相対密度11.36羽/kmであった。優占度の高いのは、カケス25.2%、ホオジロ18.9%、キセキレイ10.1%、ヒヨドリ8.2%、ハシボソガラス8.2%であり、出現頻度はカケス、ホオジロが100%、キセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、オオリリが70%と高かった。次にこの調査地区において、他の2調査地区にみられないものに、キセキレイ、カワガラス、カモsp.、ハシボソガラスがある。前3種はいずれも川の存在と大きく関係しており、ハシボソガラスは、全て市ノ瀬の建物のある付近で観察しており、人間活動とのかかわりが大きいと考えられる。

II 区

猿壁堰堤から標高1650mまでの範囲で、ブナ帯の中の登山道沿いである。全般的に、樹高15—30mに達するブナ林であるが、標高1200mくらいまではトチノキーサワグルミ林が発達しているところがあり、標高1600m近くからはダケカンバが混じるようになる。ブナは1700mを越えるところまで出現するが、ブナが優占する標高1650mまでをこの調査地区とした。林の中を沢が流れているところがあったり、部分的に樹冠部がない低木林や傾斜地の高茎草原となっているところがある。またブナ林の林床は、オオカメノキ、マルバマンサク、オオバクロモジ、チシマザサなどが疎らに生えているが、標高1550m付近から上方は、ブナの樹高が少し低くなり、林が明るくなると共に、林床はチシマザサなどが多くなりやや密な林となる。調査距離は毎回3.7kmであり、調査時間は10回の合計で1360分である。

出現種数は35、相対密度16.92羽/kmであった。優占度の高いのは、ヒガラ13.6%、コガラ11.5%、シジュウカラ9.9%、コルリ8.6%、ゴジュウカラ8.3%の順であり、出現頻度はヒガラ、キビタキ、ミソサザイ、クロジが100%、シジュウカラ、ウグイス、メボソムシクイが90%と特に高くなっている。しかし、毎回の記録を詳しく分析してみると、これらの中で特にコガラと、ヒガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラでは群で発見されることが多く、その中には巣立ち後の家族群などと考えられるものが多かった。7月後半の調査では、この付近のブナ林では、すでに繁殖期の終わっている種類も多いことが考えられる。そこで、5—6月の調査で、天候条件の悪くない1982年6月22日、1983年5月23日、1984年6月28日の3回に限って集計してみると、優占度1位はコルリ19.3%で、以下シジュウカラ11.1%、ヒガラ8.2%、キビタキ7.4%、ミソサザイ7.4%となっている。これらが繁殖期の優占上位種と考えるべきかも知れない。特にコルリの多いのが目立っている。

個体数が比較的多く、この調査地区だけに出現しているものに、コルリ、コガラ、キビタキ、マミジロがある。また、キツツキ類（コゲラ、オオアカゲラ、アオゲラ、アカゲラ）の多いのも、この調査地区の特徴である。次にウソ、メボソムシクイの個体数も少なくないが、これらはこの調査地区の上限近くに出現しており、分布の中心はIII区にある。

III 区

標高1650mから御舎利山の頂上までの登山道沿いで、ダケカンバ林、アオモリトドマツ林が大部分を占める亜高山帯の植生である。下部は少しブナが混じり、上部では2300m付近からハイマツ林となる。全般的に樹高の低い林であり、高木林（樹高10—15m）は標高1800mくらいまでで、それから上部は樹高2—5mの明るい林となり、ササ原や草原が所々にある。特に標高1800m付近から1900mにかけてはササ原や草原が広がっている。調査距離は毎回3.8kmであり、調査時間は5回の合計で657分である。

出現種数は25、相対密度16.00羽/kmであった。メボソムシクイが優占度25%で最も多く、次いでウグイス18.4%カヤクグリ12.2%ルリビタキ9.9%である。出現頻度100%の種が、これら4種の他にミソサザイ、ピンズイ、ウソ、ホシガラス、コマドリを加えて9種と多い。この中でカヤクグリと

表2 チブリ尾根の鳥類集計結果 (II区)

調査年月日	1980.7.17	1981.7.22	1982.6.22	1982.7.23	1983.5.23	1983.7.19	1984.6.28	1984.7.18	1985.6.20	1985.7.26	個体数合計	相対密度 (N/km)	相対優占度 (%)	出現頻度 (%)
調査時刻	5:13~8:30	5:23~7:50	5:00~7:55	5:14~7:42	5:30~8:40	5:05~7:50	5:05~7:50	5:50~8:50	5:05~8:30	5:21~8:20				
調査時間	148分	109分	144分	128分	137分	135分	144分	130分	134分	151分				
天気	晴	曇, 霧	晴	晴	曇	晴	晴	曇一時雨	曇のち雨	晴				
ヒガラ	8	4	5	11	10	11	5	3	5	23	85	2.30	13.6	100
コガラ	5		8	6	2	21		2	8	20	72	1.95	11.5	80
シジュウカラ	5	9	13	6	9		5	4	4	7	62	1.68	9.9	90
コルリ			16	1	10		21	1	5		54	1.46	8.6	60
ゴジュウカラ	2	3	9	8	3	11	1		6	9	52	1.41	8.3	90
キビタキ	4	8	8	5	4	3	6	4	3	1	46	1.24	7.3	100
ミソサザイ	3	3	6	3	9	3	3	1	5	1	37	1.00	5.9	100
クロジ	1	1	6	2	5	5	4	3	2	3	32	0.86	5.1	100
ウグイス	4	4	3	5	5	3	1		3	4	32	0.86	5.1	90
カケス	2		3	2	3	3	5	1	5		24	0.65	3.8	80
エナガ							8	11			19	0.51	3.0	20
ヤマドリ				12	1						13	0.35	2.1	20
マミジロ		2	1	2	5	1	1				12	0.32	1.9	60
ウソ			2				3		5	2	12	0.32	1.9	50
コゲラ	2			2	3	3		1			11	0.30	1.8	50
メボソムシクイ	1	2		2	1	1	1	1	1	1	11	0.30	1.8	90
オオルリ	1		1		3		2		1		8	0.22	1.3	50
ジュウイチ			*		5						5	0.14	0.8	10
キジバト					5						5	0.14	0.8	10
ツツドリ			1		2			1			4	0.11	0.6	30
オオアカゲラ	1					1				2	4	0.11	0.6	30
ヤマガラ		1	2								3	0.08	0.5	20
アオゲラ		*	1		1	1					3	0.08	0.5	30
アカゲラ			2							1	3	0.08	0.5	20
ビンズイ				2		1					3	0.08	0.5	20
トラツグミ					1				1		2	0.05	0.3	20
コマドリ	1		*							1	2	0.05	0.3	20
ヤブサメ			1								1	0.03	0.2	10
ホトトギス			*	*					1		1	0.03	0.2	10
ホシガラス	*			1							1	0.03	0.2	10
オオタカ				1							1	0.03	0.2	10
アカショウビン					1						1	0.03	0.2	10
ヒヨドリ							1				1	0.03	0.2	10
カウコウ			*								1	0.03	0.2	10
コノハズク				*										
キツツキ sp.	1	1		1	1						4	0.11	0.6	40
合計 (35種)	41	38	88	72	89	68	67	33	55	75	626	16.92	—	—

*調査範囲外

ルリビタキはこの調査地区だけに出現している。また、アマツバメ、イワツバメ、キクイタダキ、イワヒバリも、数は少ないがこの調査地区特有の種で、他の地区には見られなかった。

(2) 調査地区間及び他地域との比較

調査時刻、時間、距離など条件が同じでないで、同じレベルで比較することは困難であるが、これらを考慮しながら3つの調査地区を比較したり、他の場所の類似の植生の鳥類と比較してみる。

種数では、II区>III区>I区で、特にII区で35種と多いのが目立っている。次に相対密度では、II区とIII区がほぼ同じであるのに比べ、I区は他の地区の71%及び67%と少ない。早朝の記録効率がより高いと考えられる時刻にI区の調査を行なっているため、この差はより大きいと考えられる。次に種構成と優占度をみると、I区及びIII区では、優占上位の5種で全体の70%以上を占め、中でもI区ではカケス、III区ではメボソムシクイが共に25%と、特定の種にかたよった構成となっている。これ

上馬：白山チブリ尾根の繁殖期の鳥類

表3 チブリ尾根の鳥類集計結果(Ⅲ区)

調査年月日	1980.7.17~18	1981.7.22	1982.6.22	1985.6.20	1985.7.26	個体数合計	相対密度 (N/km)	相対優占度 (%)	出現頻度 (%)
調査時刻	8:30~9:57 5:00~6:25	7:50~10:55	7:55~11:51	9:00~13:00	8:20~11:59				
調査時間	137分	124分	143分	131分	122分				
天気	晴	曇, 霧	晴	曇, 霧	晴				
メボソムシクイ	13	24	14	14	11	76	4.00	25.0	100
ウグイス	10	11	14	12	9	56	2.95	18.4	100
カヤクグリ	10	5	6	11	5	37	1.95	12.2	100
ルリビタキ	10	5	4	4	7	30	1.58	9.9	100
ミソサザイ	4	2	7	6	1	20	1.05	6.6	100
ビンズイ	5	1	5	2	3	16	0.84	5.3	100
ウソソ	2	3	3	2	2	12	0.63	3.9	100
ホシガラス	3	3	3	1	1	11	0.58	3.6	100
コマドリ	2	3	2	2	2	11	0.58	3.6	100
アマツバメ			4	3		7	0.37	2.3	40
ヒガラ		3		2		5	0.26	1.6	40
クロジ	2			2	1	5	0.26	1.6	60
キクイタダキ		2	1			3	0.16	1.0	40
イワツバメ	3					3	0.16	1.0	20
イワヒバリ				2		2	0.11	0.7	20
キジバト	1					1	0.05	0.3	20
ゴジュウカラ		1				1	0.05	0.3	20
トビ			1			1	0.05	0.3	20
ノスリ	*		1			1	0.05	0.3	20
クマタカ			1			1	0.05	0.3	20
ツツドリ		1				1	0.05	0.3	20
コゲラ		1				1	0.05	0.3	20
カケス				1		1	0.05	0.3	20
アカゲラ				1		1	0.05	0.3	20
イヌワシ				1		1	0.05	0.3	20
合計 (25種)	65	65	66	66	42	304	16.00	—	—

* 調査範囲外

に対しⅡ区では、数種だけで大部分を占めるということもなく、ある種だけが特に多いということもない。

Ⅰ区及びⅢ区は、Ⅱ区に比較して植生、特に林の構造が、Ⅰ区では低木林や、まだ成長段階にある高木の少ないドロノキ林であること、Ⅲ区でも大部分のダケカンバ、アオモリトドマツは背の低いものであるなど、全般に単調なことが、それぞれの調査地区の種構成に関係していると考えられる。また両地区とも草原やササ原、低木のしげみなどが多いことが、ホオジロ、ウグイス、カヤクグリなどが優占している原因と考えられる。それに対し、Ⅱ区では、原生状態にある樹高の高いブナ林で、林内の構造も階層の発達しているところや、垂高木・低木層が少なく開けているところ、倒木があって樹冠部がないところや、急斜面の低木の繁みの広がるところがあるなど、複雑な植生であることが、種数の多さや森林性の種が優占していることと大きくかかわっていると考えられる。

Ⅰ区及びⅢ区については、県内にこれらと比較できる資料はみあたらないが、筆者が行なった高三郎山及び奈良岳のブナ林の資料(表4)とⅡ区を比較してみる。高三郎山のブナ林の資料は、標高1,180mから1,421mまでの13回の調査の、また奈良岳のブナ林の資料は、標高880mから1,550mまでの1回の調査の結果で、共に5~6月の朝の記録である。これらの山に比べてⅡ区では、優占上位種にコガラ、ゴジュウカラ、キビタキがいることが大きな特徴といえる。特にコガラ、ゴジュウカラは前記2つの山の調査地域には出現していない。これは、それらの山のブナ林の構造が、チブリ尾根

のブナ林に比較するとより単調なことと関係しているとも考えられる。共に地形的な影響があって、ブナ林の広がりには狭く、急斜面や谷筋に草原や低木林が発達している。ウグイスが高三郎山で15.66%、奈良岳で10.83%と多いのも、それを裏付けている。その他、全体の種類相はよく似ており、WHITTAKERの類似度指数($\Sigma \min(A_i, B_i)$)、ただし A_i, B_i はA、Bの2つの群集におけるi番目の共通種の、それぞれの群集における優占度で、類似度指数は優占度の低い方の値を共通全種について積算したもの。)が、チブリ尾根と高三郎山で70.9、チブリ尾根と奈良岳で67.6と、かなり高くなっている。

次に、県内各地の調査がなされて全体としてまとめられている長野県の山の鳥類相(信州鳥類生態研究グループ、1977)と、白山のチブリ尾根の調査結果を比較してみる。まずブナ林では、長野県の5カ所のブナ林を合わせた個体数の集計で、上位4種はチブリ尾根と同じである。ただヒガラが他を大きく引き離して(2位のコガラの約3倍)多い点や、サンショウクイ、センダイムシクイ、サメビタキなどチブリ尾根では出現しない種がかなり多い個体数を占めている点は大きなちがいである。また、ダケカンバ林やアオモリトドマツ林との比較では、チブリ尾根は2つの林が明確に分離しておらず、それぞれ別々に比較できないが、長野県では両方の林でクイタダキ、メボソムシクイ、ヒガラ、ルリビタキ、ミソサザイ、ウグイスなどが個体数が多くなっているのに対し、チブリ尾根ではクイタダキ、ヒガラがごく少ないことと、カヤクグリが多いことが顕著なちがいとなっている。またエゾムシクイ、キバシリ、サメビタキなど白山ではごく稀にしか出現しない種が、長野県の亜高山帯の林に比較的多くいるのも異なっている。これらは、チブリ尾根の亜高山帯の林が高木林の少ないこと、特にアオモリトドマツ等の針葉樹の高木林が長野県に比べてごく少ないことが原因と考えられる。このような植生の特徴は、白山の亜高山帯の一般的な傾向であるが、そのような環境を好むクイタダキやヒガラがほとんどみられず、逆に低木林に適したカヤクグリが多くなっているのであろう。

2) 垂直分布

チブリ尾根全体で、優占度や出現頻度の高い種の垂直分布を示したものが図2である。これは市ノ瀬から御舎利山までを、標高差25m毎に区別し、その範囲に記録された種の、調査回数10回分のうち(標高1,925m以上については5回)の記録回数の多さを3区分して示したものである。たとえば、標高差25mに、ある調査時に何羽出現してもそれは1回と数えてあり、必ずしもその範囲に個体数が

表4 高三郎山及び奈良岳のブナ林の鳥類の種構成

高三郎山		奈良岳	
種	%	種	%
ウグイス	15.66	シジュウカラ	16.67
コルリ	15.66	ヒガラ	15.83
シジュウカラ	14.86	コルリ	13.33
ヒガラ	14.06	ウグイス	10.83
エナガ	6.02	ヤマドリ	5.00
ミソサザイ	4.82	カケス	5.00
コマドリ	3.61	クロジ	4.17
カケス	3.21	ジュウイチ	4.17
クロジ	3.21	ミソサザイ	3.33
ウソソ	3.21	ホトトギス	2.50
ジュウイチ	2.01	アカゲラ	2.50
ヤマドリ	2.01	アミジロ	2.50
マミジロ	1.61	オオルリ	2.50
ホトトギス	1.61	ツツドリ	2.50
アカゲラ	1.20	キビタキ	1.67
オオルリ	1.20	ヤブサメ	1.67
ビンズイ	1.20	カッコウ	1.67
ヒヨドリ	0.80	コマドリ	0.83
カッコウ	0.80	モズ	0.83
キシバト	0.40	アオゲラ	0.83
センダイムシクイ	0.40	サシバ	0.83
メジロ	0.40	コゲラ	0.83
イカル	0.40		
キビタキ	0.40		
アオゲラ	0.40		
サンショウクイ	0.40		
モズ	0.40		
計	27種	計	22種

上馬(1978, 1981)より

上馬：白山チプリ尾根の繁殖期の鳥類

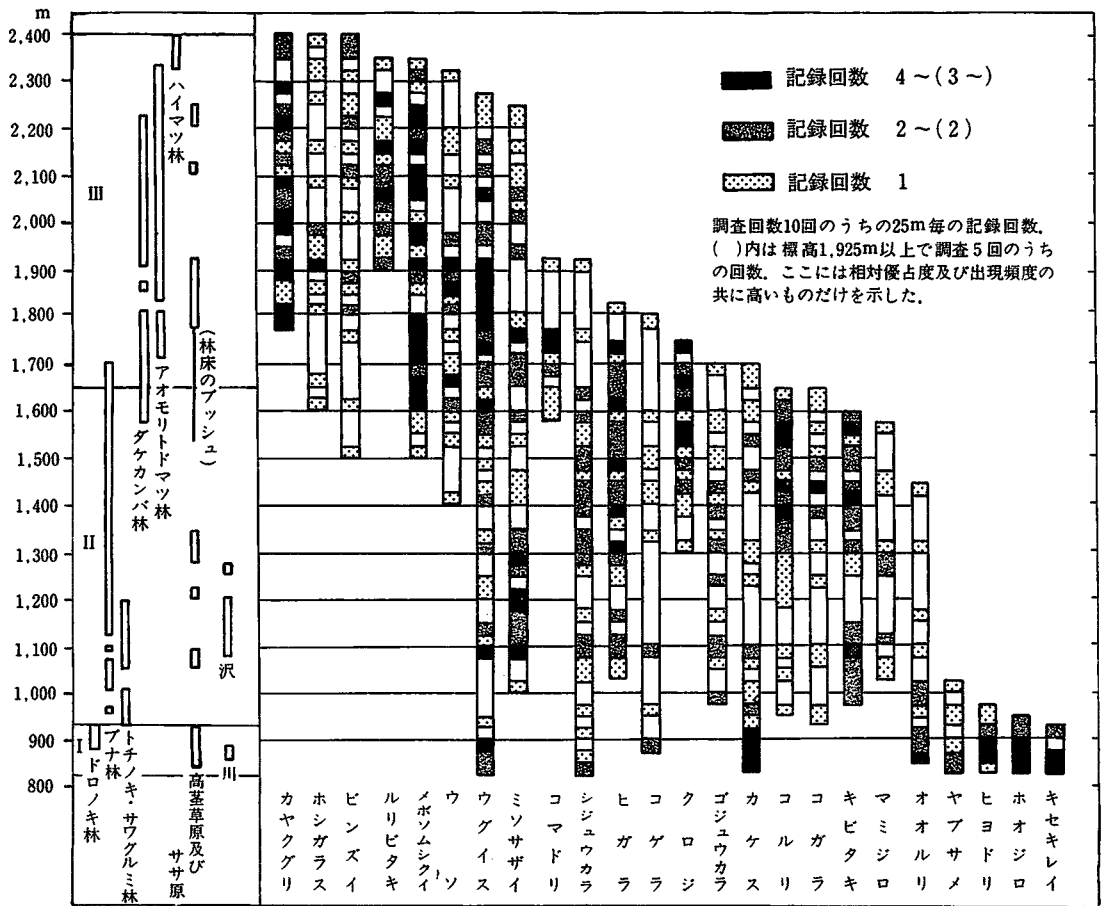


図2 白山チプリ尾根の主要鳥類垂直分布図

多いことを示しているのではなく、その種がその範囲（環境）に一般的であるかどうかを表わしている。

これをみると、この地域の鳥類群集を構成しているものには、その種の分布の中心が、(a)大別される植生または高度できまっているもの、(b)大別される植生には関係なく広く分布し、より小さな環境に支配されていると考えられるもの、(c)ある環境に限定されているものなどがあることがわかる。

aに相当するものには、亜高山帯の植生に分布しているカヤクグリ、ホシガラス、ビンズイ、ルリビタキ、メボソムシクイ、ウソがある。この中でルリビタキは、その中でもまた別の環境に支配されているようで、他よりも狭い分布を示している。次にブナ林に分布の中心があるものにシジュウカラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、コルリ、コガラ、キビタキ、マミジロがある。またヒヨドリとホオジロは、この地域においてはIII区にあたる川原の林や草原にのみ生息し、原生状態で林のよく発達しているブナ林へは分布を広げられないようである。しかし車道の延びている柳谷の対岸では、標高1,500 m以上のところにもホオジロが生息している。

bに相当するものにはウグイスとミソサザイがあげられる。ウグイスは、ササ原や高茎草原などの繁みに強く結びついており、ミソサザイは沢と、この図に示されていないが急斜面が、分布を支配する要因となっていることが明らかとなった。

次にcに相当するものには、コマドリ、クロジ、キセキレイがある。コマドリが生息していたのは、

ブナ帯上部から亜高山帯下部にかけての高木林で、小さな谷筋や急斜面の低木の繁みのある環境であった。クロジもブナ帯上部から亜高山帯下部にかけて生息しており、数は比較的多く、樹高のあまり高くない明るいブナ林で、林床がササや低木の繁みとなっているところにみられた。キセキレイは、川原か建物の周辺にみられ、これらとの結びつきが強いと考えられる。

なお標高別に種数を比較してみると、図3のようになり、最も多いのは標高1,500 mから1,600 mまでの範囲で、計16種あり、ここに示した24種のうちの67%を占めている。次いで多いのは1,400 mから1,500 mまでと、1,600 mから1,700 mまでの14種である。そして、1,400 mから1,700 mまでを含めると18種、75%となる。すなわち、ブナ帯上部から亜高山帯下部にかけての移行部分が、最も豊かな鳥類相を示しているところである。また種数の最も少ないのは1,800 mから1,900 mまでのところの7種、29%であるが、その環境は林が少なく草原やササ原の多いところである。

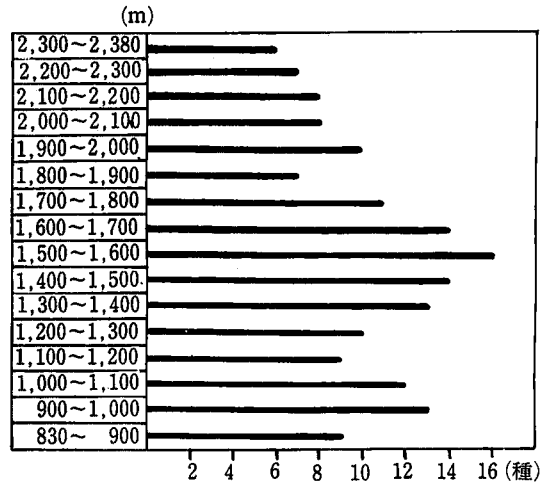


図3 白山チブリ尾根の標高別主要鳥類の種数

おわりに

白山山系にはブナの原生林がまだ各地に残っているが、平坦な場所の広がり大きな林は多くない。今までの調査で鳥類相の明らかにできたところは、今回の比較にした高三郎山、奈良岳など、急斜面が多く、ブナ林は尾根状のところであり幅はあまり広くない。それに対しチブリ尾根は、かなりの広がりをもつブナ林で、その中に様々な植生や地形的環境要素も含んでおり、また亜高山帯の植生も、針葉樹の高木が少ないなど、共に白山を代表できる植生といえる。このような環境の中で、今回明らかにできた鳥類相は、白山のブナ帯から亜高山帯のそれを代表できるものと考えられる。

摘 要

- 1) 白山チブリ尾根の繁殖期の鳥類相を、1980年から1985年に線センサス法により調査した。
- 2) 環境は大きく3つに別れており、川原のドロノキ林及び草原には、カケス、ホオジロ、キセキレイ、ヒヨドリ、ハシボソガラスが、ブナ林にはヒガラ、コガラ、シジュウカラ、コルリ、ゴジュウカラ、キビタキが、亜高山帯のダケカンパーアオモリトドマツ林には、メボソムシクイ、ウグイス、カヤクグリ、ルリビタキがそれぞれの優占上位種となっていた。
- 3) 長野県の調査資料と比較すると、優占上位種はブナ林では同じであるが、亜高山帯の林ではかなりのちがいがみられた。
- 4) 白山の亜高山帯の植生が、特に針葉樹の高木林が少ないことが、長野県の山岳の鳥類相とのちがいの原因であると考えられる。
- 5) チブリ尾根全体の主要種の垂直分布図を作成し、各種と環境との関係についても述べた。

文 献

- 金沢地方气象台 (1975~1984) 石川県気象年報, 昭和 50 年~昭和 59 年, 日本気象協会北陸センター。
信州鳥類生態研究グループ (1977) 長野県の野鳥—繁殖期の鳥類群集について—, 長野県林務部林政課。
上馬康生 (1977) 犀川源流地区の鳥類, 石川県の自然環境第 3 冊鳥獣, p. 66—80, 石川県。
——— (1978) 犀川上流, 高三郎山の鳥類 (1)繁殖期における鳥類群集構造, 石川県白山自然保護センター研究報告第 4 集, p. 63—78。
——— (1979) 犀川上流, 高三郎山の鳥類 (2)生息期間と個体数の季節変化, 石川県白山自然保護センター研究報告第 5 集, p. 67—86。
——— (1981) 鳥類, 白山地域自然環境調査報告書, p. 61—73, 石川県環境部。
——— (1982) 鳥類, 尾添川流域自然環境保全対策調査報告書, p. 59—63, 石川県。

Summary

The surveys on bird communities of Chiburi ridge in Mt. Hakusan by the method of line transect were made in breeding season from 1980 to 1985. *Garrulus glandarius*, *Emberiza cioides*, *Motacilla cinerea*, *Hypsipetes amaurotis* and *Corvus corone* were dominant species in the lower part forest which consist of *Populus maximowiczii* and *Miscanthus sinensis*. *Parus ater*, *Parus montanus*, *Parus major*, *Erithacus cyane*, *Sitta europaea* and *Ficedula narcissina* were dominant in the middle part forest which consist of *Fagus crenata*. *Phylloscopus borealis*, *Cettia diphone*, *Prunella rubida* and *Tarsiger cyanurus* were dominant in the upper part forest which consist of *Abies mariesii* and *Betula ermanii*. Comparing the bird communities of Mt. Hakusan with those of mountains in Nagano Prefecture, the dominant species in *Fagus crenata* forest were very similar but those of *Abies mariessi* and *Betula ermanii* forest were very different. *Prunella rubida* was dominant in subalpine zone of Mt. Hakusan but it was not so in Nagano Prefecture, and *Regulus regulus* and *Parus ater* were dominant in the latter case. It seems to be caused because the coniferous forest is poorer and lower level and the bush is more seem in subalpine zone of Mt. Hakusan as compared with that of mountains in Nagano Prefecture.